

初産婦の追跡調査による周産期の 母性意識の変化について

東京大学母子保健学教室

松岡 恵 (Megumi Matsuoka)

国立公衆衛生院

新道 幸恵 (Sachie Shindo)

聖路加看護大学

高木 廣文 (Hirofumi Takagi)

初産婦の追跡調査による周産期の 母性意識の変化について

東京大学母子保健学教室

松岡 恵 (Megumi Matsuoka)

国立公衆衛生院

新道 幸恵 (Sachie Shindo)

聖路加看護大学

高木 廣文 (Hirofumi Takagi)

I 要約

周産期における初産婦の母性に関わる意識の変化を調べる目的で、初産婦に対して、妊娠28週以降、産褥早期(産褥3-5日)、産後1月の3回、質問紙による追跡調査を行った。91例の調査データの分析結果から、以下の内容が明らかになった。

1) 妊娠後期から産後1月の間では、夫や友人の支援、実母への愛着、夫への愛着の一部である妻の夫への愛着の要求を示す項目については、意識に大差がなかった。

2) 本人の性格、夫への愛着に関わる項目、すなわち「夫が私の髪型や服装に関心を示して欲しい」、および妻の夫への愛着を示す項目では、妊娠後期から産後1月の間で比較的大きな意識の変化が見られた。

3) 項目「私は子供が好きである」は夫や友人の支援、夫への愛着、実母への愛着と同様の意識変化の傾向が認められた。

4) 「忍耐強い」などのいわゆる「強い性格」であると自覚する割合は、妊娠期から産褥早期、産褥早期から産後1月へと次第に増加する傾向が認められた。

5) 「現在の自分に満足している」、「女に生まれてよかった」という項目は、出産や育児体験の受けとめ方による影響を受けるものと考えられた。

6) 「夫は子供が好きである」という母親(妻)の認識は、夫の子供との接触や育児体験に伴い増加す

るものと考えられた。

上記の結果から、産後1月前後の育児疲れ等の影響を受け易い時期においては、特に、夫や友人、実母の支援を強化する必要性が示唆された。

II はじめに

女性にとって、妊娠、分娩、育児の体験は母性意識の発達を促すものと考えられるが、一つの危機状況であるとも考えられ、この時期に看護上の援助を必要とする女性も少なくない。

これまで、周産期の女性に関する心理社会的側面からの研究には、妊娠の受容を左右する要因に関するもの¹⁻³⁾、妊婦の不安要因に関するもの⁴⁻⁶⁾、褥婦の不安^{7,8)}、妊娠後期と産後の不安の変化⁸⁻¹¹⁾などの報告が多く、母性意識の発達という点からの研究は平井¹²⁾、大日向¹³⁾の他はあまり多くない。

我々は、これまで母性意識、すなわち「女性が子供に対して持つ特殊な意識」¹⁴⁾の発達を促すための看護援助を考える目的で、成熟期未婚女性¹⁴⁾、妊婦¹⁵⁾、産褥早期¹⁶⁾、産後1月¹⁷⁾の女性の母性意識に関与する因子を探索し報告してきた。今回は、同一の対象者について、妊娠後期、産褥早期、産後1月の各時期で母性に関わる意識の調査を行い、各項目について、経時的な変化を分析し、若干の知見を得たので報告する。

III 調査対象と分析方法

昭和59年に聖路加国際病院で妊婦健診を受け、出産した初産婦106名を調査対象とした。初産婦に対し、妊娠28週以降、産褥早期(産褥3-5日)、産

後1月の3回、質問紙による追跡調査を行った。調査票は、妊娠期と産褥早期には直接配布、回収し、産後1月には郵送した。3回の調査すべてに対する有効回答数は91名、回収率は85.8%であった。

調査項目は、本人の自己観、子供への愛着、夫や実母への愛着、重要他者の支援に関する29項目である(表3参照)。回答は、各項目に対して「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」のうち一つだけ選択するように指示した。

主要な計算は東京大学大型計算機センターのHI-TAC-M280Hを用い、統計処理は主にSPSSを利用した。

分析には以下の方法を用いた。

1) 同一対象の回答が各調査時期で一致した割合(回答一致率)により、意識の変化の程度を表す指標とした。

2) 各項目の「はい」の回答率の調査時期別比較により、その項目に関連する意識の変化を検討した。妊娠期を基準として、産褥早期と産後1月の「母比率の差の検定」を行った。

3) 母性意識に肯定的に影響すると考えられる意識に関する項目で、その回答が「いいえ」から「どちらでもない」、「いいえ」から「はい」または、「どちらでもない」から「はい」に変化した割合を肯定的変化とよぶことにする。また、「はい」から「どちらでもない」、「はい」から「いいえ」または「どちらでもない」から「いいえ」に変化した割合を否定的変化とよぶことにする。両者について各期間別の変化を比較した。同様に、母性意識に否定的に影響すると考えられる項目について、上記と逆の手順により各期間別の変化を比較した。

4) これまでに我々が抽出した因子¹⁵⁻¹⁷⁾のうちに、妊娠期、産褥早期、産後1月に共通する「子供への愛着」、「夫への愛着」、「実母への愛着」、「夫や友人の支援」、「本人の性格」の5因子との関連で、各項目の持つ意味を考察した。

IV 結果

1) 対象の背景

結婚年数は妊娠期において平均2.2年であった。本人の最終学歴は、各種学校・短大が48.0%と最も多く、次に大学・大学院が30.0%であった。また、有職者は20.0%であり、核家族が86.0%を占めた

(表1)。また、夫の職業は、専門職が30.0%と最も多く、次いで事務職が24.0%であった(表2)。

表1. 対象の背景

	例数	率(%)
1) 最終卒業学校		
中学校・高校	20	22.0
各種学校・短大	43	48.0
大学・大学院	28	30.0
2) 職業の有無		
有	18	20.0
無	73	80.0
3) 家族構成		
核家族	78	86.0
拡大家族	13	14.0

表2. 対象の背景(夫の職業)

	例数	率(%)
専 門 職	27	30.0
事 務 職	22	24.0
管 理 職	8	9.0
販 売 業	9	10.0
技術工等	10	11.0
そ の 他	15	16.0
合 計	91	100.0

2) 回答一致率

全質問項目の回答一致率の平均は、妊娠期と産褥早期の間では75.1%と高い数値を示していた。

3 調査期間の組合せで、各項目の回答一致率の平均値を表3に示した。「夫が私の気持ちを理解して欲しい」が95.1%、「夫が相談相手にいてほしい」が94.3%と夫への愛着に関する項目で高かった。また、「気楽に相談できる友人がいる」が91.5%、「夫は子供が好きである」が87.8%、「私は子供が好きである」が78.9%、「女に生まれてよかった」が78.4%と比較的高い一致率であった。「自分の母親と一緒にいると楽しい」が80.1%、「どちらかというとお母さん子である」が77.7%と実母への愛着に関する項目でも回答一致率が高かった。

また、回答一致率の平均が70%以下と比較的低い項目は、表3に示すように「私は忍耐強い方だ」、「友達と比べて恐いもの知らずだ」などのいわゆる比較的強い性格に関する項目と、「夫が私の髪型や服装に関心を示して欲しい」、「夫の世話が楽しい」

表 3. 3 期の組合せによる回答一致率の平均値

項 目	率(%)
② 夫が私の気持ちを理解してほしい	95.1
① 夫が相談相手でいて欲しい	94.3
① 気楽に相談できる友人がいる	91.5
② 夫は私の味方であって欲しい	91.1
① 夫がそばにいと安心する	90.6
夫は子供が好きである	87.8
① 夫は心の支えである	86.9
② 夫からきれいだと言われたい	85.0
③ 自分の母親と一緒にいると楽しい	80.1
結婚前によく家事を手伝った	79.3
私は子供が好きである	78.9
女に生まれてよかった	78.4
予定していた妊娠である	78.5
③ どちらかというとお母さん子である	77.7
③ 自分の母親のようになりたい	73.6
② 夫は生きるはりあいである	73.6
① 夫は育児の相談相手である	73.1
現在の自分に満足している	73.0
④ チャホヤされるのが好きである	71.1
④ 私はあきっぱい性格である	71.1
④ 私はわがままな性格である	71.1
④ 危険や困難に出会うと後込みするほうだ	70.8
④ 私は他人の意見に左右されやすい	69.9
② 夫が私の髪型や服装に関心を示してほしい	69.9
② 夫の世話が楽しい	68.3
② 私の幸せは夫次第である	67.5
⑤ 生活に不平、不満があってもがまんする	66.6
⑤ 友達に比べて怖いもの知らずだ	65.5
⑤ 私は忍耐強い方だ	62.2

左の番号は次の因子群を示す

- | | |
|-------------|-----------|
| ① 夫や友人の支援因子 | ④ 未熟な性格因子 |
| ② 夫への愛着因子 | ⑤ 強い性格の項目 |
| ③ 実母への愛着因子 | |

などの夫への愛着に関する項目の一部であった。

2) 「はい」の回答率の変化

「はい」の回答率の変化を、「夫や友人の支援」、「夫への愛着」、「実母への愛着」、「未熟な性格」、「強い性格」という5つの因子群と「私は子供が好きである」等の4つの単独項目に分けて表4に示した。夫や友人の支援は5項目、夫への愛着は7項目、実母への愛着は3項目、未熟な性格は5項目、強い性格は3項目の平均値である。子供への愛着に関わる「私は子供が好きである」という項目は、妊娠期75.6%、産褥早期80.2%、産後1月75.6%と産褥早期が最も高い傾向がみられた。これと同様な変化傾向を示したものは、「夫や友人の支援」、「夫への愛着」、「実母への愛着」、「未熟な性格」にの各因子に関する項目であった。この中で、「夫や友人

の支援」は、妊娠期から産褥1早期の変化は1%水準で有意差が認められ、「夫への愛着」は妊娠期から産後1月にかけての変化は5%水準で有意差が認められた。

表 4. 「はい」の回答率の変化

	妊娠期	産褥早期	産後1月
「私は子供が好きである」	75.6	80.2	75.6
夫や友人の支援	86.8	91.5**	89.5
夫への愛着	69.8	73.7	72.1*
実母への愛着	50.0	54.9	51.6
未熟な性格	31.5	33.2	31.1
「夫は子供が好きである」	79.3	90.0**	92.7**
強い性格	29.5	30.3	38.1
「女に生まれて良かった」	76.8	73.2*	70.7*
「現在の自分に満足している」	65.8	63.4	54.9

** : $P < 0.01$, * : $P < 0.05$ 単位 %

「夫は子供が好きである」という項目は、妊娠期79.3%、産褥早期90.2%、産後1月92.7%と産後1月が最も高かった。この変化は妊娠期を基準にして、産褥早期、産後1月とも5%水準で有意差が認められた。また、「私は忍耐強い性格である」、「友達と比べて怖いもの知らずの方だ」などのいわゆる強い性格に関する項目も、妊娠期29.5%、産褥早期30.3%、産後1月38.1%とやはり産後1月が最も高い傾向があったが統計的な有意差が認められなかった。

「女に生まれて良かった」という項目は、妊娠期が76.8%と最も高く、産褥早期73.2%、産後1月70.7%と徐々に低くなっていった。この変化は妊娠期を基準にして、産褥早期と産後1月で有意差が認められた($p < 0.05$)。有意差は認められなかったが、同様な変化の傾向を示したのものには「現在の自分に満足している」という項目があった。

4) 母性意識に肯定的に変化した割合の高い項目
妊娠期から産褥早期にかけて、母性意識からみて肯定的と思われる方向に変化した割合が高かった項目を、表5に示した。「私の幸せは夫次第である」、「夫の世話が楽しい」などの夫への愛着に関わる項目や、「夫は育児の相談相手である」、「気楽に相談できる友人がいる」などの夫や友人の支援に関わる項目、「自分の母親のような母親になりたい」などの実母への愛着に関わる項目、そして「夫は子供が好きである」でそれぞれ肯定的変化が高かった。

表 5. 肯定的変化の割合が高い項目
(妊娠期から産褥早期)

項 目	肯定的 変 化	否定的 変 化
私の幸せは夫次第である	32.9	11.0
夫は育児の相談相手である	20.7	7.3
夫は子供が好きである	12.2	0.0
夫の世話が楽しい	20.7	8.6
自分の母親のような母親になりたい	17.1	7.3
気楽に相談できる友人がいる	8.5	0.0
私は子供が好きである	14.6	8.6
夫は相談相手でいて欲しい	6.1	1.2
夫が私の髪型や服装に関心を示して欲しい	17.1	13.4
現在の自分に満足している	17.1	13.4
夫は心の支えである	7.3	3.7
私は我がままな性格である	15.9	13.4
夫を生きるはりあいにしたい	14.6	13.4
夫がそばにいと安心である	2.4	1.2

単位 %

同様な変化を産褥早期から産後1月にかけて見たものを表6に示した。「友達と比べて怖いもの知らずの方だ」、「危険や困難に出会ったと後込みする」、「私は我がままな性格である」などの性格に関する項目と、「夫が私の髪型や服装に関心を示して欲しい」などの夫への愛着に関する項目で肯定的変化の割合が高かった。

表 6. 肯定的変化の割合が高い項目
(産褥早期から産後1月)

項 目	肯定的 変 化	否定的 変 化
友達と比べて怖いもの知らずの方だ	23.6	8.5
夫が私の髪型や服装に関心を示して欲しい	20.7	7.4
どちらかというとお母さん子だ	12.1	1.1
危険や困難に出会ったと後込みする	18.3	9.7
私は我がままな性格である	15.9	8.5
皆からチャホヤされるのが好き	17.1	12.2
夫は私の味方であって欲しい	6.1	1.2
夫は子供が好きである	4.9	2.4
夫は育児の相談相手である	12.2	9.8
自分の母親と一緒にいと楽しい	8.5	6.1
夫からきれいだと言われたい	7.3	4.9
夫が私の気持ちを理解して欲しい	2.4	1.3

単位 %

妊娠期から産後1月の間での肯定的変化については表7に示した。「夫が私の髪型や服装に関心を示して欲しい」、「私の幸せは夫次第である」などの夫への愛着に関する項目と「夫は育児の相談相手である」、「気楽に相談できる友人がいる」などの夫や友人の支援に関する項目、「私は我がままな性格である」、「危険や困難に出会ったと後込みする」、

表 7. 肯定的変化の割合が高い項目
(妊娠期から産後1月)

項 目	肯定的 変 化	否定的 変 化
夫が私の髪型や服装に関心を示して欲しい	24.4	7.4
夫は子供が好きである	15.9	1.2
夫は育児の相談相手である	22.0	8.5
私は我がままな性格である	22.0	10.9
私の幸せは夫次第である	26.8	17.1
危険や困難に出会ったと後込みする	19.5	12.2
気楽に相談できる友人がいる	8.5	2.5
私は忍耐強い性格である	18.3	14.6
自分の母親のような母親になりたい	18.3	14.6
夫は相談相手でいてほしい	4.9	1.2
皆からチャホヤされるのが好き	14.6	13.4
私は子供が好きである	13.4	12.2

単位 %

「私は忍耐強い性格である」などの性格に関する項目、そして、「夫や子供が好きである」で肯定的変化の割合が高かった。

V 考 察

母性意識は、上田¹⁾が指摘しているように、妊娠、出産の経験によって発達する。我々は、母性意識に関わる意識の、妊娠、出産、育児体験による変化の程度、変化の方向性などを回答一致率、「はい」の回答率の変化、肯定的変化の割合で分析した。

まず、回答一致率が高い、すなわち変化の少なかった項目のうち、「私は子供が好きである」は、「はい」の回答一致率、肯定的変化の割合からみて、妊娠期から産褥早期にかけて高くなり、産褥早期から産後1月にかけて低くなっている。これは、産褥早期が、入院中で育児を全面的に引き受けている状況ではないことから、母親が授乳などによって、子供との接触を深めることに専念し、子供と接する喜びが増しているためと考えられる。この時期はクラウドス¹⁸⁾によれば母性的感受期にあたり、子供に対する関心が特に高まっている時期と考えられよう。それに対し、産後1月は、育児を全面的に引受け、育児の困難さを体験することにより、子供が好きであるという気持ちを持ち得なくなった人があるものと考えられる。育児の困難性を体験することは育児不安という形でも表れるが、平野⁹⁾、影山¹⁰⁾は、妊娠期と産後1月の不安を比較し、特に初産婦において産後1月時に不安が上昇すると報告している。そして、伊藤⁸⁾は産後の不安は母親としての実感や育児の自信の喪失によるものと述べている。これらの

ことから、産後1月に「子供が好き」が低下することは育児不安の上昇と関連があるものと考えられる。

項目「私は子供が好きである」と同様の变化傾向を示すものに「夫や友人の支援」、「夫への愛着」、「実母への愛着」の各因子に関する項目群があるが、これらの因子は我々のこれまでの調査¹⁵⁻¹⁷⁾において、子供への愛着、すなわち母性意識に肯定的に作用する因子と考えられている。従って、これらの因子の変化は「私は子供が好きである」という子供への愛着に関わる項目の変化に特に強い影響を与えているものと考えられよう。

夫や友人の支援については「はい」の回答率は「私は子供が好きである」と同様に、産褥早期に最も高くなっている。また、肯定的変化の割合では、「夫は育児の相談相手である」という項目が、「はい」の回答率の変化と異なり、産褥早期から産後1月にかけて増加していた。この理由として、育児に関しては産褥早期は入院中で、夫よりも医療関係者を相談相手としていたが、退院と同時に夫を相談相手とする割合が増えたためと考えられる。

「実母への愛着」に関する因子については、これも「はい」の回答率は「私は子供が好きである」と同様の变化傾向を示しているが、「どちらかというとお母さん子」、「自分の母親と一緒にいると楽しい」は、産褥早期から産後1月にかけて肯定的に変化した割合は増加していた。これは、退院後、実母の手伝いを受けたり、実母に相談することにより、必ずしも実母を母親モデルにしなくても、実母への愛着を改めて認識する割合が増えたためと考えられる。

「夫は子供が好きである」も回答一致率の高い、すなわち変化の少ない項目であったが、これまでの因子群とは違い、「はい」の回答率は妊娠から産褥早期、産褥早期から産後1月へと有意に増加し、肯定的な変化の割合からも同様の変化が認められていた。この中で、特に妊娠から産褥早期にかけての肯定的変化の割合をみると（表5）、否定的変化が全くなく、これは注目に値しよう。この結果は、褥婦の目からみた夫の反応で、必ずしも夫自身の意識ではないが、夫が子供と接触することによって妊娠期よりも夫が喜んでいることを、ほとんどの褥婦が認めた結果であると思われる。

ナッシュ¹⁹⁾は、乳児初期の母子関係の形成と同様に、父子関係の形成にも決定的な時期があると主張し、ペダーソン²⁰⁾も、父親が新生児を抱いたり触ったりすることが、父親-乳児の絆に影響を及ぼすと指摘している。このように、父親自身の子供に対する愛着が子供に接する機会を持つにつれて強まり、その結果、母親からも「夫は子供が好きである」と思えるようになったと考えられよう。しかし、産後1月には否定的変化が一部に表れている。これは、母親と同様に退院後、育児に実際に関わることによって、子供への愛着が減少した夫がいることを示すものと考えられる。

「女に生まれてよかった」は、やはり回答一致率が高く、意識の変化の少ない項目の一つである。この項目は、「はい」の回答率が妊娠に最も高く、産褥早期、産後1月と有意に低下していた。我々の妊娠期の調査¹⁵⁾で既に述べているように、子供を産み育てるといういわゆる「伝統的な女性役割」を受け入れ、女に生まれたことを喜ぶ気持ちは、「夫への愛着」や「現在の自分に満足している」という項目と関連が強い。これは、回答一致率が低く、意識の変化が大きい「現在の自分に満足している」をみると、「はい」の回答率は「女に生まれてよかった」と同様の变化傾向が示されていたことから明らかである。分娩に対する恐怖や分娩体験の否定的観念が母性意識に否定的に作用することはこれまで報告してきたが^{15,16)}、これらの妊娠から産褥早期への意識の減少は、分娩体験の否定的な印象が影響していると考えられる。そして、産褥早期から産後1月にかけての減少は、前述のように育児の困難性の経験、及び後述するように、夫への愛着の減少とも関連があるものと考えられる。「女に生まれてよかった」、「現在の自分に満足している」という妊娠して子供を産み育てることを受容する意識が産褥早期から産後1月に低下したことは、「私は子供が好きである」が「はい」の回答率、肯定的変化の割合で低下していることとも関連があると思われる。

次に回答一致率の低い、妊娠、分娩、産褥期の意識の変化が大きい項目について検討する。

すでに述べたように、性格に関する項目では、いわゆる「未熟な性格」を示すものと考えられる「私は他人の意見に左右されやすい」と、いわゆる「強

い性格」を示す「生活に不平や不満があっても我慢する」、「友達に比べて恐いもの知らずだ」、「私は忍耐強い方だ」を調査した。「未熟な性格」は、「はい」の回答率では産褥早期に最も高くなるが、これは育児に関する学習の直後で、医療関係者や友人、実母などの育児に関する助言や指導に影響され易い自己を認識したためと考えられる。そして、「強い性格」は、「はい」の回答率では妊娠期から産褥早期、産褥早期から産後1月と高くなる傾向がみられた。ドイツ²¹⁾によれば、母性愛は子供のために完全に自己を滅却し、自分の生命をも含めて何物も喜んで犠牲にするという自己犠牲に基づくものとされる。ここで強い性格を示す回答率が、妊娠、出産、育児体験を経て上昇しているのは、この自己犠牲をもいとわない母性愛が、これらの過程を通じて形成されてきていることを意味するものと考えられる。

最後に夫への愛着に関して検討を加える。夫への愛着に関する7項目全体の「はい」の回答率の変化は、産褥早期に最も高く、産後1月に低下していたが、妊娠期を基準にして変化を見ると、産後1月に有意に高くなっていた。回答一致率の高い3項目と「夫は私の髪型や服装に関心を示して欲しい」という項目で産褥早期から産後1月に肯定的変化の割合が高いことが認められた。また、妊娠期から産褥早期にかけて肯定的に変化しているものには回答一致率の低い項目が多かった。これらのことから、「夫への愛着」に関しては、「夫が私の気持ちを理解してほしい」、「夫は私の味方であってほしい」、「夫からきれいだといわれたい」などの、妻の夫への愛着の要求に関する項目と、「夫の世話が楽しい」、「私の幸せは夫次第である」などの妻の夫への愛着を示す項目があると考えられた。これは、夫への愛着が、夫と妻の相互関係によって形成されるためと考えられよう。妊娠期から産褥早期にかけては、出産によって自分の子供を得た喜びと、入院による夫との別居の影響により、夫への感謝や愛情を再認識し夫への関心や配慮が強まるものと考えられる。しかし、妻の夫への愛着の変化により、産褥早期から産後1月にかけては、退院後、育児に追われて夫への配慮ができなくなる場合があると考えられる。また、一方では、育児の困難さに対する援助を夫に求

めようとする気持ちが増加するためと考えられる。

以上のことから、「私は子供が好きである」という子供への愛着、すなわち母性意識は、夫や友人の支援、夫への愛着、実母への愛着と関係が深いことが示されたといえるだろう。また、それらは、産後1月の育児疲れの現れやすい時期にいずれも低下し、その結果、子供を産み育てるといいうわゆる伝統的な女性役割を受容しがたくさせ、母性意識の発達を阻害する方向に作用するものと考えられた。産褥早期の母性意識の形成を妨げるものには、分娩体験の否定的な観念があることは既に報告している¹⁶⁾。従って、看護者は、特に性格に未熟性が認められ、母性意識の発達が難しい女性や、産褥早期に分娩体験の否定的観念を持つ女性には、夫や友人、実母の支援を強め、夫への愛着が強化されるよう家族全体に働きかけるような指導を行うことが重要であると示唆される。

この研究の一部は第26回日本母性衛生学会で発表した。

VI 引用文献

- 1) 上田礼子, 他: 妊娠・出産・産褥期の適応行動(1)妊娠の受容, 母性衛生, 22(1); 93-97, 1981.
- 2) 川崎佳代子, 他: 妊婦の精神衛生—妊娠の受けとめ方とそれに左右する要因について—, 母性衛生, 23(4): 11-20, 1983.
- 3) 桜山豊夫, 他: 予期しない妊娠を経験した婦人の特性について, 母性衛生, 25(1); 90-95, 1984.
- 4) 持丸文雄, 他: 妊婦の不安に対する家族構成の影響, 母性衛生, 24(3, 4合併号); 254-257, 1983.
- 5) 近藤潤子: 妊娠中の不安傾向が母児におよぼす影響, 母性衛生, 13(1); 54-63, 1972.
- 6) 三井政子, 他: 妊婦の心理に関する一考察, 母性衛生, 20(1); 99-105, 1979.
- 7) 伊藤範子, 他: 初産婦の育児自信の喪失, 母性衛生, 24(1); 68-72, 1983.
- 8) 川嶋洋子: 母親たちの不安—出産前後をめぐる—助産婦雑誌, 35(9); 667-672, 1981.
- 9) 平野恵子, 他: 褥婦の心理と適応性, 母性衛生, 24(2); 48-52, 1983.
- 10) 影山初子, 他: 褥婦の心理と適応性(第2報), 母性衛生, 25(2); 248-252, 1984.

- 11) 福間恵子, 他: 褥婦の心理と適応性(第3報), 母性衛生, 26(3); 302-307, 1985.
- 12) 平井信義編: 母性愛の研究, 東京, 同文書院, 昭和56年, 初版.
- 13) 大日向雅美: 母性の形成及び変容過程に関する研究, 人間文化研究年報, 9(3); 29-47, 1985.
- 14) 松岡恵, 他: 成熟期未婚女性の母性意識に関与する因子—私立看護大生へのアンケート調査の多変量解析—, 母性衛生, 24(3, 4 合併号); 221-229, 1983.
- 15) 松岡恵, 他: 妊婦の母性意識に関与する因子について, 母性衛生, 26(3); 353-360, 1985.
- 16) 新道幸恵, 他: 産褥早期の褥婦の母性意識に関与する因子について, 母性衛生, 26(2); 209-213, 1985.
- 17) 新道幸恵, 他: 産後1ヶ月の褥婦の母性意識とそれに関与する因子, 母性衛生, 28(1); 138-143, 1987.
- 18) KLAUS, M. H., KENNEL, J. H., (竹内徹, 柏木哲夫訳): 母と子のきずな, 医学書院, 東京, 1979. 第1版.
- 19) LAMB, M., (久米稔, 他訳): 父親の役割—乳幼児発達とのかかわり—, 家政教育社, 東京, 1981. 第1版.
- 20) PEDERSEN, F. A., (依田明監訳): 父子関係の心理学, 新曜社, 東京, 昭和61年, 第1版.
- 21) DEUTSCH, H., (懸田克朗, 原百代訳): 母親の心理2, 生命の誕生, 日本教文社, 東京, 昭和39年, 初版.

VII 参考文献

- 1) Nie, N. H., et. al.: Statistical Package for Social Sciences, 2nd edit., McGraw-Hill, Inc., 1975.
- 2) 柳井晴夫, 高木廣文編著: 多変量解析ハンドブック, 現代数学社, 京都, 1986. 初版.